

6.5 教育の質の向上

進捗状況報告

2005年度に引き続き、2006年度も商学部FD委員会主催で春・秋にそれぞれFD教授研究会を開催した。春学期に開催されたFD教授研究会では、「①2005年度授業評価の結果について」、「② クラス担任制について」、「③ 学生調査の結果について」というテーマで研究会を開催した。まず、テーマ①に関しては、2005年度に全学的に実施された学生による授業評価のアンケートの集計結果に関する資料の読み方に関する説明が行われ、続いてそれに関する議論が行われた。その際、「評価を何時の時点で行うのがよいのか?」、「この結果をどのように今後生かせばよいのか?」、「記名の有無」、「質問項目にも不備な点があるのではないのか?」、等の質問が出され、これに対して活発な議論が展開された。なお、ここで行われた議論によって学生による授業評価そのものに関する学部教員のそれぞれの考えを共有できたことはFD活動に関する意識の向上に大いに役立つものである。なおこのようなテーマを扱ったオープンな形式での研究会は初の試みと思われる。

次に、テーマ②は、2006年度より1年生の演習（商学演習）の担当教員を「クラス担任」として位置づけるという制度の導入に伴って行われたものである。実際にクラスの学生（演習生）やオフィスアワー（OH）の時間中で気になった生徒等が存在しないかなどを各教員に事前にヒアリングし、それを集計したものを資料として作成し、それにもとづく意見交換を行った。このことは大学教育においてもきめ細かなケアを行うことを目的としたものであり、このような制度を充実させることによって、教育の質、学生の質を保証することにつながるものと思われる。

最後にテーマ③では①で扱われた授業評価の結果に対する教員側からのコメントや今後の改善点についての資料にもとづき意見を交換した。ここで与えられた改善点等を共有することもFD活動に関する意識の向上につながるものと思われる。

また、秋学期に開催されたFD教授研究会では、2006年度に新しく赴任した9人の教員をパネリストとしたパネルディスカッション形式で、「関学生の印象」、「前任校の学生との比較」、「少人数教育や多人数講義での工夫」、「それに対する学生の反応」などのテーマについて発表して頂いた後、フロアも含めての懇談を行った。新任教員による意見は、商学部の教育に対して新しい視点を与えたり、問題点を示唆するものであり、FDの意識を向上する上で役立つものとなった。また、2004年度に発足した教育活性化小委員会は、小委員会の位置づけから格上げされ2006年度には教育活性化委員会として新たに編成された。商学部のカリキュラムに関する問題点を商学部の理念を見据えた上で、短期的・長期的な視点から検討を行い、諮問に対する答申が昨年末に提出された。それにもとづき、コース制の見直し等に関する懇談が教授会で行われた。なお、具体的な方針が審議の結果として決定されるにはいたらなかったが、今後の商学部のあり方を根本的に見直すよい機会となった。次に、GPA 制度の活用に関しては、全学的な方針としてGPAの上位者を掲示することによって学生を啓発することが実施されており、この基準に基づく下位の学生に対するケアを現在検討中である。ライフデザイン・プログラムに関しては、近日中に「アドバイザー・パネル」（旧 アドバイザー・コミッティー）と執行部会委員による会議を開催し、意見交換会を行うことを予定している。

学内第三者評価

商学部では、FD委員会が2005年度から毎年度2回ずつFD教授研究会を開催し、全教員が参加して「大教室講義について」「少人数教育」「2005年度授業評価の結果について」「クラス担任制について」「学生調査の結果について」などの議題を定めて活発に論議が行われてきた。また、2006年度秋はパネルディスカッション形式で、「関学生の印象」、「前任校の学生との比較」、「少人数教育や多人数講義での工夫」、「それに対する学生の反応」などのテーマについて教員が発表した後、フロアも含めての懇談を行うなど、教育の質の向上に向けた活動が進められている。

教育活性化委員会とともに積極的な取り組みが展開されている印象を受ける。今後は、論議の中で収斂した学部としての指針などを明確に定めていくことや、教育の質の向上がどの程度進展・達成されているかについてより客観的な評価を行うために自ら指標を定め、FD活動の成果について検証することが望まれる。

なお、特別委員からは以下の意見があった。
・2005年度の「方策」が着実に実施されているものと評価できる。